

米サンフランシスコ市が美しいだけでなく住みやすい町であるといわれる所以は、数十年前から自転車や歩行者に対するインフラが改善されていることにあります<sup>1</sup>。自転車利用の促進による交通渋滞の軽減など、環境に配慮した、より快適な街づくりを進めています。日々の移動手段として自転車の利用を増やすため活動している同市の自転車協会によると、2007年から2011年の5年間で、自転車の利用者は71%増加したそうです。この急速な増加は、同市が交通インフラや公共スペースにおける自転車道路を積極的に整備したことが影響しています。2012年には、新規に加え、既存のビルにも自転車用の駐車場の設置を義務付ける法律を制定し、通勤時のさらなる自転車利用を促進しています。

同市が、自転車や歩行者を重視する方針へ転換したきっかけの一つは、1989年のサンフランシスコ大地震です。地震の際、国道の破壊や高速道路の倒壊、それに伴う自動車交通網の麻痺が起こり、ビジネスに多大な影響を及ぼしました。1995年に発生した阪神淡路大震災も、主要な交通基盤に大きな被害を与え、利用可能な数少ない通行可能区間に自動車が集まり、道路交通の混乱を招きました。このような状況において、被災地で“足”として機動性を発揮したのが自転車でした。2011年の東日本大震災のときは、交通機関の麻痺により、帰宅困難者があふれた中で、自転車を利用して帰宅した人々がありました。また、通勤・通学手段のほか、食料品の買い出しや家族・親戚との連絡など、様々な場面で役立ちました。自転車の利用促進は、環境配慮型の都市計画の一部であるとともに、災害発生時の混乱を抑制し、より安心して安全なまちづくりにつながるのではないか。

---

<sup>1</sup>ECOLOGICALIZER “Bicycling Increases 71 Percent in San Francisco” 2012年6月20日